2. 国際標準会議での体験談

デコボコ標準化日記

～ヤングボーイと呼ばれて～

東日本電信電話株式会社

古敷谷 優介

Yuusuke Koshikiya

1 ま え が き

「あのヤングボーイはもう少し経験を積む必要はあるが、いい奴だ」。ITU-T（国際電気通信連合 電気通信標準化部門）の議場で、SG15のWP2副議長が、私を評して上司にそう語ったそうです。社内では若手などとは口が裂けても言えない年次になっていて、それを証明する風貌にもなっていたのですが、ここITU-T SG15の標準化活動の場では、まだまだヤングボーイで通るようでした。日本語の適訳としては、「若手」というより、「若造」なのかもしれません。

本稿はそんなヤングボーイが標準化活動の場で実際に聞いて感じたことについてお伝えし、若い皆さんに標準化活動への興味を持って頂くためのきっかけとなれば幸いです。なお、多分に不勉強な記述があるかとは思いますが、あくまで経験不足なヤングボーイの一意見として御容赦頂ければ幸いです。

2 事 の 発 端

そもそも私が標準化活動に関わるようになったきっかけは何だったのでしょうか。実は、はっきりとは覚えていません。強いて言えば入社時の採用面談で、よく知りもせずに「標準化活動に携わりたい」と言ったことぐらいでしょうか。この辺りの詳しい経緯を上司に聞いてみたのですが、曖昧な回答

図1 ITUの議場の様子。前方にあるのが議長席とスクリーン

しか得られず、どうやら「特別優秀な私に白羽の矢が立った」などという華々しいエピソードは期待できないようです。そこで、本稿のタイトルを「デコボコ標準化日記」としました。

とはいえ、ITU-Tの場で国際標準化活動に携わると聞いた当時の私は、まだ何もしていないのに、まるで自分がグローバルな人間になったような気分で、とてもワクワクしていたのを覚えています。このワクワク感、数年経った今でも会合の度に感じています。ただし、今は緊張9割、ワクワク1割です。それまで、ほとんど日本を出ることなく生活してきた私は、国際標準化活動以前に、世界の人々と英語でコミュニケーションを取る行為自体に魅力を感じていたような気がします。高校の期末試験でThursdayの綴りを間違えて赤点を取った頃には想像もしなかった新たな一面の発見でした（もちろん今は全曜日を誤りなく書くことができます）。とにかく、何事にもまずは飛び込んでみることで、知らなかった世界や新たな自分に会えるものです。

3 ITU-T SG15

ここで、私が標準化活動に携わっていたITU-T SG15について簡単に紹介します。SG15は有線に関する電気通信全般の標準化を担うITU-Tの中で最も大きな研究委員会（SG：Study Group）の一つであり、主に光伝達網及びアクセス網の基盤技術に関する標準化を担当しています。図2に示すように、SG15は三つの作業部会（WP：Working Party）にて構成されていて、各WPは技術テーマごとに設定される課題グループ（ITU-TではQuestionと呼びます）から成ります。この課題グループを最小単位として勧告制定に向けた議論がなされます。役職者としては、SG、WPそ

図2 ITU-T及びSG15の構成

れぞれに議長 / 副議長がおり、また、実務上の役職としては、課題グループの責任者として勧告草案を議論する際の議長を務めるラポータ (Rapporteur)、勧告草案ごとの草案作成責任者であり、記載内容の絞込みや記載文書の編集の取りまとめを行うエディタ (Editor) があります。私は、2004 年から電磁防護・屋外設備委員会の SG6 (現在は SG15 と合併) 国内窓口を担当し、その後、SG15 WP2 にて 2009 年から現在までの 3 年間にわたって、課題グループ 18 が所掌する勧告である L.89 のエディタを務めました。そこで体験したことについて、以下に紹介します。

4 国際標準化の国内担当 ! ?

国際標準化活動の世界へは飛び込んだというよりは放り込まれたという感があります。最初の仕事は ITU-T SG 6 国内窓口担当というグローバルな仕事のドメスティック担当でした。なお、以下が当時担当していた業務概要です。

「ITU-T SG 6 での国際標準化活動において、他国提出寄与文書記載内容の確認及び対処方針の策定補佐、各種関連団体との調整窓口、会合中の国内サポート、各種取りまとめ・事務処理」

“会合中の国内サポート” から分かるように、当面の私の海外での活躍はなくなりました。しかし、今考えれば当然の結果です。技術力不足、英語力不足、経験値不足の三拍子そろった私が、当社のみならず日本の国益をも左右する国際標準化の場に、そう簡単に参加できるわけがありません。

ところが、最初はがっかりしていたものの、“いつかは自分も会合の場へ” と前向きに考えることができるようになってきました。今思えば、自分の力のなさは自身が一番分かっていたし、それを知りながら、成長のための努力を怠っていた自分にも気付いていたのだと思います。国内窓口担当の業務命令がそんな自分に活を入れてくれたように思っています。それに、実際にやってみるとこれがなかなか面白い仕事でした。いわゆる事務局業務といわれるもので、会合前には社内や国内委員会の日程調整・案内、資料作成から会合参加者の航空券・ホテルの手配、会合後には報告対象 (社内 / 社外向け、専門家 / 一般向け等) に合わせた報告資料の作成や国内委員会、社内関連部署への報告など、小さな多くの案件をマルチでこなしていくことが求められました。このような業務は世の中一般の会社人にとっては当たり前の仕事なのかもしれませんが、研究所で一つの技術とばかり向き合っていた私にとっては新鮮な経験でした。いかにして、効率良く、手戻りなく、最適な (決して最高ではない) 品質で各案件に対応するか? それを追及して楽しみつつ取り組んでいたように記憶しています。

この担当でもう一つ重要な業務が“他国提出寄与書記載内容の確認及び対処方針の策定補佐”です。国際標準化では事前の準備が極めて大切だと考えています。やはり我々はネイティブスピーカと比較した場合、語学力という観点から会議場での議論においては不利です。私が感じた標準化の場で求められる英語力とは、いわゆるスピーキングではなく、“瞬発力のあるスピーキング”です。他国の提案に対して間髪入れずに賛成や反対を示さなければならない状況において、何も事前準備や情報がなくこれに対応するのは実に難しいことです。しかし、事前に他国の意見が寄書から判明していて、その対処方針を「A 国がこの提案をしたら即座に反対を示す」のように、あらかじめ策定しておけば瞬発的に対応することができます。このように、対処方針の策定は議場で展開される様々なシナリオを事前に想定しておくことであり、英語を母国語としない我々が国際標準化の場で戦うにあたって、極めて重要な事項であると考えています。特に私のように英語力に自信のない者にとってはなおさらです。ただし、想定外の事態が発生して臨機応変な対応を求められることも多くあります。しかしそれでも、対処方針をしっかり策定していたおかげで、致命的な事態に陥ることはほとんどありませんでした。

備が極めて大切だと考えています。やはり我々はネイティブスピーカと比較した場合、語学力という観点から会議場での議論においては不利です。私が感じた標準化の場で求められる英語力とは、いわゆるスピーキングではなく、“瞬発力のあるスピーキング”です。他国の提案に対して間髪入れずに賛成や反対を示さなければならない状況において、何も事前準備や情報がなくこれに対応するのは実に難しいことです。しかし、事前に他国の意見が寄書から判明していて、その対処方針を「A 国がこの提案をしたら即座に反対を示す」のように、あらかじめ策定しておけば瞬発的に対応することができます。このように、対処方針の策定は議場で展開される様々なシナリオを事前に想定しておくことであり、英語を母国語としない我々が国際標準化の場で戦うにあたって、極めて重要な事項であると考えています。特に私のように英語力に自信のない者にとってはなおさらです。ただし、想定外の事態が発生して臨機応変な対応を求められることも多くあります。しかしそれでも、対処方針をしっかり策定していたおかげで、致命的な事態に陥ることはほとんどありませんでした。

5 会合デビュー

国内窓口を 5 年ほど担当した後、とうとう ITU-T SG15 の会合にデビューできることになりました。この段階でも、英語力と経験値はまだまだ不足していたと思いますが、この 5 年間の通常の研究開発業務と、国内窓口としての各種対処方針策定業務のおかげで、担当する技術分野におけるある程度の技術力は身に付けていたように思います。あくまで個人的な見解ですが、技術力、英語力、経験のうち、一つだけでも自分が自信を持てるものがあれば、まずは国際標準化活動の場にデビューしてみるのも面白いと思います。

周囲の不安をよそに当の本人は期待に胸を膨らませて会合に臨みました。しかし結果は散々なものでした。まず、会合の作法・手順が分かりません。更に、技術用語はある程度理解できたのですが、語学力不足のため会議の中で用いられていた英語表現で理解できないものが多く苦労しました。議長が使う “You have the floor.” や “We are running out of time.” などがその例です。それぞれ “発言していいですよ”, “時間切れになりそうです” といった意味なのですが、当時の私にはそれすら理解できませんでした。

また、滞在初期に、日本人の感覚でいうところの大盛り料理を毎食平らげていたことに合わせて、慣れない長期海外滞在 (SG15 の場合は会合期間は 2 週間です) の疲れが重なり、体調を崩してしまいました。当然仕事のパフォーマンスも落ちてしまい情けない思いをしました。このようなことが積み重なって各国の担当者と十分にコミュニケーションがとれないまま会合は終了してしまいました。最低限の役目は果たせたものの、極めて不本意な会合でした。デビュー会合では、会議作法・進行手順の理解及び体調管理の重要性を痛感させ

られました。未だに“全く役に立てなかった”という思いが強く印象に残っています。

6 同じ轍は二度踏まぬ

鼻柱を折られて帰国したわけですが、自分なりに対策を講じることにしました。ITU-T SG15 の会合は、ITU 本部のあるスイスのジュネーブで、約 8 か月ごとに開催されるため、準備の時間は比較的確保できました。

会議手順や会議中に用いられていた英語表現の把握については、自身の記録用に会議の様態を録音した音源を利用しました。これを繰り返し聞いて会議手順や表現を把握していきしました。事前に会議の流れが分かっていると、「そろそろレポートが折衷案を提案してくるタイミングだから、許容できる内容かどうかしっかり聞いて対応するぞ」などと次のアクションの準備ができます。対策の甲斐あって、以降の会合では会議そのものの進行で慌てることは少なくなり、議論の理解度も高まりました。また、集中すべきポイントが分かるようになったので、疲労感も随分軽減されました。ITU 会合での経験不足を補うための当時の私なりの工夫でした。

会合時の体調管理に関しては、特別な対策というものはないのですが、食の選択と集中を心掛けました。基本的に標準化の議論はなかなか疲れます。慣れない異国の地での生活も知らず知らずのうちにストレスとなります。私の場合それを食事で発散していたのですが、毎食思うままに食事をとっていると、今度は胃腸が悲鳴を上げてしまいました。帰国後には体重計に乗った自分も悲鳴を上げることになってしまいました。そこで、食の選択と集中を実践しました。朝食は一日の活力とするべく適量を心掛け、昼食はサラダを中心に軽く済ませ、夕食はストレス発散のためにしっかりととることにしました。ストイックに取り組みきれていない感がありますが、カレーとラーメンとハンバーグが好物という私にしてみれば、良く決断したと褒めてやりたいと思います。ITU のカフェテリアにはサラダバーが設置されていて、それを昼食にすると野菜不足の解消にもなり、調子を保つことができました。飽きてきたら気分を変えてマフィン等の甘い物を試してみるなどしながら、胃腸の調子が悪くなることなく 2 週間を乗り切ることができました。余談ですが、私の上司はかつて大先輩からこう言われたそうです。「ジュネーブに来て太るようでは苦労が足りない。痩せるぐらい仕事をしないと」。会合の度にメタボの階段を上っている私には耳が痛い話であり、やはり先達は偉大です。

7 エディティング

2 度目の会合参加となった 2010 年の SG15 第 3 回会合では自身がエディタを担当していた勧告草案のコンセント (consent: 勧告案が会合で承認されること) を経験しました。

一般的に勧告草案のコンセントまでの過程には、提案された勧告草案に対し、議論を通して記載内容の合意を図る過程と、その合意に基づき勧告草案に記載された文章を修正して最終案を作成するエディティング (またはドラフティングと呼ばれる) の過程があります。

このときはラポータからの要請で、会議室の大型スクリーンに勧告草案を映し出しながら私のハンドリングで編集作業を進めていくことになりました。これまで、会合の一出席者として意見を述べて議論に参加することはあったのですが、議場の前方にある議長席に座って会議自体 (といってもエディティング作業ですが) をハンドリングすることになるとは思ってもいなかったのでもとて焦ったのを記憶しています。事前のディスカッションで記載内容の合意が取れているとはいえ、細かいニュアンスの問題や認識の相違などで議論になる場面も多くありました。そんな中で、決まった時間内に最終合意文書を作る作業は、当時の自分の能力では簡単ではありませんでした。加えて、語学力不足もあり、発言の理解や文書作成に手間取る場面も多々ありました。しかし、参加者から不満が出てもおかしくない拙い会議進行であったにもかかわらず、不思議とそういうことにはなりません。

ここに ITU-T での標準化活動の魅力があると私は思います。この会合では、初会合で役立てなかった分を取り返したいという考えでいました。当時、日本の FTTH 加入者数は 1,700 万を超え、他国を圧倒する数字でした。アクセス網の設計や構成を扱う課題 18 では、実績に基づく日本の知見が必ず役に立つはずであると考え、様々な案件に対して技術面で協力するように努めました。例えば、日本のアクセス網の具体的な構成例として PON (Passive Optical Network) を紹介し、なぜそのような構成にするのかという設計思想にも言及しました。日本の実態に基づく説明であり、具体的なイメージがしやすく好評でした。結果的に勧告作成に大きく貢献できたと思っています。このような姿勢のおかげで、私の拙いエディティングに対し不満が出ることなく、皆の協力の下、勧告作成が完遂できたのだと思います。誠実に仕事をすれば皆に認めてもらえて、サポートを得られる場なのだということを実感しました。同時に、周囲のサポートなしでも迷惑を掛けずに対応できるだけの能力を身に付けたいと決意を新たにしました。

国際標準化という各国、各社規格のサバイバル、利益を確保するための戦いをイメージしがちですが、それはある一面だと感じています。もちろん、各社、各国の利益確保という使命を持って集まってはいますが、根底には、皆で知恵や技術を持ち寄って、世の中の人々が安心してつながることのできる指針を作ろうという、とても前向きで、ある種、単純明快な共通意識があるように感じてなりません。このような気風を諸先輩は“極めて崇高な活動”、“世界の隅々までつなぐたい”、“ボランティア的な意気込み”と評していっぱい

ますが、正にその気概を感じることができました^{(1)~(3)}。

5. で“初会合で全く役に立てなかった”と書きましたが、これは“会社の”や“日本の”ではなく、どちらかというと“ITUの仲間の”という感覚の方が強くありました。第6回会合では、エディタを担当していた勧告 L.89 に関して、早朝までかかって何とか前日までの議論を反映した勧告案を書き上げ、最終日のエディティング作業に間に合わせたことがありました。ファイルの更新時間を見たアメリカの代表と WP2 副議長が、“寝る時間はあったのか？ 無理はしなくていいぞ”と声をかけてくれました。国際標準化活動で感じた意外に人間臭い一面でした。

8 笑う膝と崩れ落ちる私

初めてのエディティングの話には少しだけ続きがあります。無事にエディティングを終え、私はノートパソコンの中にある最終稿をしっかりとセーブしました。このファイルが消えようものならここまでの苦労が水の泡です。やり遂げたという安堵感の中、席を立ち上がり、壇上にある議長席から歩き出した途端、異変に気付きました。膝が笑ってうまく歩けなくなっていたのです。エディティングのプレッシャーで想像以上に全身に力が入っていたようでした。気付いたときにはすでに遅く、見事につまずいてしまいました。“もう一度あの奇跡的なエディティングを完遂する自信はない！ このノートパソコンだけは守らねば！！”と殊勝な決意の中、派手に転んでしまいました。そこに WP2 副議長が駆け寄ってきて（転んだ恥ずかしさで正確には覚えていないのですが）、「パソコンより自分の体を守れ。でも、Good job だ。」というようなことを言っていました。こうして、血と汗と涙の結晶である勧告最終案はしっかりと守られ、無事にコンセンツすることができました。

この後、WP2 副議長が冒頭に紹介した私を評した言葉を上司に伝えたそうです。かつて想像していたスマートな国際標準化活動とは全くかけ離れたことになってしまいましたが、まだまだ“ヤングボーイ”だった私は、もっともっと努力しなければという決意を新たにすると同時に、会合で役立てたという喜びを感じた一幕でした。

9 む す び

実を言うとこの記事が掲載される頃には、私は国際標準化活動から少し離れる予定です。そんな事情もあり、いろいろな出来事を思い出しながら記事を書かせて頂きました。多少面白おかしく記述した面もありますが、実際の国際標準化活動には苦しいこともたくさんあります。しかし、その過程で得た仲間とのつながり、充実感、自身の成長はかけがえのないものであると信じています。だからこそ、本稿を通して多くの方に国際標準化活動に興味を持って頂き、

その中からチャンスがあれば思い切って飛び込んで来る“ヤングボーイ”が登場することを期待しています。それが、これまで国際標準化活動でお世話になった方々への恩返しになれば幸いです。

Appendix ジュネーブお勧めレストラン

ジュネーブへの出張者のために山崎先生がレストラン情報を御寄稿されています⁽⁴⁾。私からもお勧めのお店を紹介したいと思います。

店舗：Le Relais de l'Entrecôte

住所：Rue du Rhône 49, 1204 Genève

図3 l'Entrecôteの店構え。ピーク時は店の外まで行列ができる。

モンブラン橋を渡ってすぐのバス停近くにあることから、我々はバス停ステーキと呼んでいる。Café de Parisと同じシステムでメインのメニューはステーキのみ。個人的にはこちらの味の方が好みではあるが、仲間内では意見の分かれるところである。是非とも食べ比べて頂きたい。ジュネーブでは珍しく行列のできる店であり、オープン直後がねらい目だが、回転が早く並んでいても少し待てば入店可能である。ゆっくり会話を楽しむ店というよりは、さっと食べてさっと出るのが粋。サラダ、ステーキ、山盛りのフレンチフライ、デザートで 60 SFr 程度。予約不可。

■ 文 献

- (1) 内海善雄, “世界で通用する通信技術のかしこい標準化戦略,” 信学誌, vol. 95, no.2, pp. 89-90, Feb. 2012.
- (2) 井上友二, “ネットワークの標準化—世界中の人々の利便さ・快適さ・安さ増進のために—,” 信学誌, vol. 95, no. 2, pp.91-95, Feb. 2012
- (3) 山崎克之, “ソサイエティあるいは教会活動について,” 信学通誌, vol. 5, no. 20, p. 355, March 2012.
- (4) 山崎克之, “ジュネーブガイド—レストランと国際標準化—,” 信学通誌, vol. 6, no. 1, pp. 44-51, June 2012.

古数谷優介 (正員)

平 15 早大大学院理工学研究科機械工学修士了。同年、日本電信電話株式会社アクセスサービスシステム研究所にて光ファイバセンシング技術の研究に従事。現在、東日本電信電話株式会社に映像配信システムの開発に従事。